小説 朝日茂

右遠俊郎

小説 朝日茂

右遠俊郎

新日本出版社

右遠　俊郎（うどお　としお）
1926年岡山市に生まれる
日本民主主義文学同盟員
主な著書『さえてるやつら』『冬の大いなる虹』『赤いシクラメン』（以上、新日本出版社）、『無傷の論理』『病犬と月』『野にさけぶ秋』『不逞の春』『わが笛よ悲しみを吹け』『長い髪の少年たち』（以上、東邦出版社）、『文学・真実・人間』（光和堂）、『青春論ノート』（青木書店）、『蒼の心人の心』（大月書店）など

小説 朝日　茂

1988年12月10日　初　版©
1989年5月15日　第7刷

著　者　右遠俊郎
発行者　山本　功

郵便番号　151　東京都渋谷区千駄ヶ谷4—25—6
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（423）8402（営業）
（423）9323（編集）
振替番号　東京3—13681
印刷　光陽印刷　製本　小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01688-0　C0093

小説

朝日

茂

第二十五条　すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

②　国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

（日本国憲法）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

見おろしは矢尾の部落に通う道何か故郷の道に似てあり

一

朝日茂は一九一三年（大正二年）七月十八日、岡山県津山市京町八十二番地に、朝日清治郎の三男として生まれた。二人の兄のほかに姉が一人いて、茂は四人きょうだいの末子であり、父清治郎四十六歳、母せい四十一歳のときの子である。

清治郎は塗師であった。仏壇や仏具、経机、あるいは、床の間の床板や重箱などに漆を塗って家業としていた。生活は楽ではなかったから、清治郎は趣味と実益を兼ねて、骨董をも扱った。が、むろん、それで貧しさが解消したわけではない。

となると、かせぎに限度がある以上、貧しさを補うには、日々の出費を締めるほかないだろう。清治郎はもともと腰の軽い、こまめなたちではあったが、女房に財布を渡さず、味噌、醤油、薪炭をはじめ日用のこまごまとしたものまで、仕事の合間を見つけては自ら買い求めていた。

清治郎のこまめさとは対照的に、せいは大まかな女であった。せいは津山近村に大工の娘として育ったが、清治郎のもとに嫁いできたときから、家事の切り盛りよりも、講談本や新聞に目を通すことを好む女であった。職人の女房には珍しく、政治面のことにも比較的よく通じていた。

たまに夫婦の間に口争いが生じたとき、言いまかされるのはたいてい清治郎の方であった。そんなとき清治郎は口惜しまぎれに、せいのことを「うちのアホウ女房」と呼んだ。が、普段、夫

婦仲は決して悪くなかった。
清治郎は末っ子の茂には甘かった。一日の仕事を終え、一合か二合の晩酌に機嫌よく酔うと、清治郎はよく茂を抱いて寝た。酒臭い寝息を頭から浴びながら、茂は清治郎の湿った胸にぴったりと頬を寄せて眠った。
せいもまた茂を、その気性にふさわしい大まかな愛情で包んだ。長兄の喜一はすでによそに出て家にはいなかったが、茂はおとなしい次兄の啓一を敬慕し、すぐ上の姉の松代には可愛がられ、貧しいけれども暖かい家庭のなかで、伸びやかに育っていった。幼い茂の、貧しいなりに充ち足りた日々であった。
清治郎は仕事の上で寺に出入りすることが多かったせいもあって、日蓮宗不受不施派の熱心な信者であった。父親の影響は子供たちにも及んだ。喜一は父に反発して、朝の「おつとめ」に加わらなかったらしいが、啓一は従順に父親のすすめを受け入れ、毎朝の「おつとめ」をすすんで行なった。清治郎の横に座して、その小さな手に数珠をまさぐる啓一の姿には、少しも不自然な様子がなかった。幼い茂も見よう見まねで父に従っているうちに、いつとなく、耳から覚えた「方便品」や「寿量品」の一部を、片言ながら誦するようになっていた。
だが、屈託のない日々のなかにも、貧しさの影は見えつ隠れつしてつきまとっていた。その影は二人の兄の身の上で、はっきりとした形になった。喜一と同じように、啓一もまた小学校を卒業するとすぐ、家を離れて、遠い他国へ出てゆかねばならなかった。それは、幼い茂の未来を暗示しているかのようであった。
長兄の喜一は、からだは小さかったが、竹を割ったような気性の男だった。が、その反面、何か気にさわるようなことがあると、前後をわきまえず思いきったことをやった。小学校の教師を

崖から突き落としたり、喧嘩相手に煮え湯をぶっかけたり、負けず嫌いの性分がはけ口を見いだし得ぬままに爆発することが多かった。貧しさゆえに、進学など思いもよらなかったから、喜一は小学校を出ると、大阪の叔父を頼って飛び出し、大阪で堂島の米相場師のもとに住み込んだ。

次兄の啓一は喜一とは違って、話し方や物腰の穏やかな少年だった。学業の方は小学校で飛び抜けてよくできた。その才能を担任の教師が惜しみ、その教師の知人のつてで、中等学校へ進めるようにはからってくれた。啓一は高等小学校三年生の途中で撫順へ渡り、炭坑事務所で働きながら勉強し、二年後、大連にある南満洲工業学校機械科に、満鉄の給費生として入学した。

仕方のないこととはいえ、喜一ばかりか啓一までもが家にいなくなると、その分だけ両親の愛情は茂に集まった。とくに清治郎は五十の坂を越して、気が弱くなったのか、茂をなめるように可愛がった。一日の仕事から解放されると清治郎は、茂を膝の上に呼び寄せて酒を汲み、酔いにまかせて茂に何かと語りかけ、世話を焼きたがった。茂が小学校に上がるときには、清治郎はわざわざ仕事を休み、入学式に出かけていった。

茂と入れかわりのように、姉の松代が小学校を卒業して、大阪へ女中奉公に出た。そして、その年の夏、清治郎はぽっくり死んだ。

その前日まで、清治郎は普段と変わった様子もなく、元気に仕事をしていた。その夜、清治郎はいつものように、茂を相手に晩酌の徳利を傾け、ほろ酔い機嫌にまかせ、茂を抱いて寝た。蚊帳のなかで半ば眠りに落ちた茂の耳に、清治郎は日頃になく、いつまでもくどくどと熱く湿った息を吐きかけていた。

「茂よ、おまえの名は夏に木が茂るという意味じゃ。木が茂るいうのはええもんじゃ。若い木はとくによう茂る。茂らんのは枯れた木じゃ。人間も茂らにゃおえん。朝日の家も茂らさにゃおえ

ん。おまえは喜一の勝気なところと、啓一の悧口なところと、両方持っとる。その上に、優しいところがある。おまえにゃ見どころがある。しっかり勉強して出世するんじゃ。茂いうのはそういうことじゃ。出世せえよ……」

清治郎の酔いの繰り言を、茂は甘美な子守歌のように聞いていた。忍び寄ってくる夢の画面に、茂った木々の梢が現われては消えてゆく。梢の背後に川の水が光り、晴れた空が見え隠れする。鶴山公園からの風景だと気がついたとき、「出世」という言葉が夢のなかに落ち込んできた。画面の中心部が割れて、そこから無数の銀色の粒子が溢れ、梢や川や空の上を流れ、波紋のように広がってゆく。

翌朝、清治郎は蚊帳のなかで冷たくなっていた。せいがそのことに気がついたとき、茂は清治郎の冷たくなった胸に額を押し当てて、無心に眠っていた。母に起こされても、茂はねぼけまなこで、しばらくはぼんやりしていた。顔色を変えて告げる母の言葉の意味が理解できなかった。

「死んだて？　だれが」

蚊帳が取りはずされ、畳の上に清治郎の布団だけが取り残されたとき、茂はやっと、いつもの朝とは違う異常さに気がついた。茂をせかしておいて慌ただしくせいが部屋を出ていったあと、茂は寝巻姿のままで改めて父の顔を見た。朝の光に白々と洗われた清治郎の顔は、いつもの父の顔ではなかった。父の顔とはよく似ていたが、明らかに父とは違う他人の顔であった。

さむざむとしたすきま風のような感情が茂の心を通りすぎた。死というものが、とりつくしまのない拒絶として感じられた。茂の心にぽかりと黒い穴があいた。その空洞を氷のような恐怖が閉ざした。反射的に茂は清治郎のからだに身を寄せた。今まで恐怖から身を守ろうとするときには、茂はいつでもそうしてきたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だが、茂がしがみついたものはすでに父ではなくなっている。そこにはもう、酒臭さも、汗に湿った暖かい肌も、弾力も、そして何より優しさがなかった。その違和な感じが、茂の恐怖を溶かすどころか、いっそうつのらせた。亡骸よりも冷たい恐怖が、茂をさらに亡骸に接近させた。ものも言えずに、茂は清治郎のからだにしがみついていた。

部屋に戻ってきたせいに、清治郎の死体から引きはなされたとき、茂は母のからだを力まかせに押しながら、初めて声を上げて泣いた。壁に押しつけた母の体温に恐怖を溶かしながら、茂は父を失ったことの悲しみを、しみじみと感じはじめていた。

清治郎享年五十三歳、一九二〇年（大正九年）のことであった。

清治郎の死んだあとには、がらくたの骨董品だけが残った。せいと、小学校一年生の茂だけでは、どうにもならなかった。すぐに大阪から喜一が呼び戻された。喜一は言われるままに津山へ帰ってきた。長男としての責任を感じたのであろうが、大阪での十年余りの暮らしが思うにまかせなかった、ということもあったろう。

津山に帰ってきた喜一を、新しい仕事が待ち受けているわけではなかった。大阪でこれという技術を身につけることのなかった喜一は、結局、家業を引きついだ。幼い頃、父の仕事ぶりを見たり、手伝ったりしたことを思い出しながら、漆塗りを始めた。器用なたちであったから、まもなくその仕事を、何とかそつなくこなすようになった。

長兄とはいっても、喜一は茂とは十九歳も年が離れていた。それに、茂が生まれるまえから大阪に出ていて、一緒に暮らすことがなかった。喜一について茂は、両親から、そのきかん気の性

格と、その性格が現われたいくつかのエピソードを聞かされていた。だから茂は、甘い清治郎に対するのとは違って、喜一に対してある恐れを抱いていた。

だが、大阪から戻ってきた喜一は、幼い心に身がまえていた茂が拍子抜けするほど優しかった。茂に対してだけでなく、喜一はだれに対してもごく穏やかに接した。大阪に出てゆく前、小さなからだいっぱいにみなぎらせていたという、あの敵意に似た鋭さはもう見られなかった。

まもなく喜一は嫁をもらった。新妻よりは、浮田の製糸工場で働いていた女子工員であった。よりが来てから、清治郎の死後、ともすれば暗くなりがちであった家のなかが明るくなった。よりは屈託のない性格で、しかも働きもの、茂の面倒もよく見た。乏しいなかから、果物やあんぱんを茂に買い与えたりもした。

喜一は一家の柱としての自覚を持ってよく働いた。父の漆塗りの仕事の引きつぎだけでは足りぬと見るや、下駄や提灯の側に、ニスやラックを塗る仕事にも手を広げた。塗り上がった製品を、小学生の茂が自転車に積んで、下駄屋や提灯屋に届けた。

子供が生まれると、喜一はいっそう仕事に精を出した。その姿には、家長としての責任感のほか、何かに向かって意地を張っているようなひたむきさが感じられた。それは、青春の夢の最後の一かけらまでもすりつぶしてしまおうとするようなすさまじさであった。喜一の家族に対する優しさは、かたくなな意地のようなものであがなわれているのかも知れなかった。

茂はそんな喜一を、目を見張って眺めた。父の死以来、茂の幼い心は揺られつづけていた。茂にとって、甘やかされ、それなりに充足した幼い日は終わっていた。父の死と、そのあとを受けて立つ兄のひたむきな姿は、茂の心の底にいやおうなく貧しさというものを刻みつけた。そして、その貧しさの意識が茂を重苦しく閉ざそうとするとき、茂は一方で、父親が残していった「出

世」という言葉を、銀色の粒子とともに思い浮かべた。
喜一はたまに茂と顔を合わせると、仕事の疲労をからだ一面に残したまま言うことがあった。
「勉強しよるか、茂。啓一を見習うて、しっかり勉強せえよ」
喜一の言葉は優しかったが、どこかに投げやりなひびきも感じられた。
茂は喜一に養われてそのまま小学校へ通った。茂は学校では明るく元気な子供であった。勉強はあまりしなかったから、成績は中位だったが、その代わりとでもいうように、ずいぶん悪戯をした。そのために、京町「悪童」三人衆の一人と目された時期があった。
仲のよい級友と吉井川で水浴びをしたり、津山城趾で「陣取り」や「賊ごっこ」をして遊んだり、草競馬の催される日には、ラムネやあんぱんを売りに行ったりした。そんなとき、茂の念頭には「貧しさ」も「出世」もなかった。茂はただ、津山盆地の上に高く広がる空に向かって、屈託のない笑いを投げる無心な少年であるにすぎなかった。
喜一に二人目の子供が生まれた。次男の次郎であった。その頃、大阪に女中奉公に行っていた姉の松代が、病を負うて帰ってきた。六っつ違いだったが、よく幼い茂の守りをしてくれた優しい姉であった。その姉が腹膜炎を患い、床についてまもなく春四月に死んだ。十六歳であった。
喜一ももともとからだは丈夫な方ではなかった。が、子供が次々に生まれるので、弱いからだに鞭打って働かねばならなかった。喜一の塗り物の仕事だけでは、七人の家族の生活は支えられなかったので、妻のよりが元の職場である製糸工場へ糸取りに通った。それで何とか日々のやりくりをつけていた。
が、喜一は腸チブスを患ったのをきっかけに、急にからだが痩せ衰えはじめた。それに咳と痰が伴うようになった。いかにも辛そうな喜一の仕事ぶりを見て、せいは休養をすすめた。

「二、三日、休んでみたらどうな」
「なに、風邪じゃ。心配するこたあねえ」
そう言って喜一は弱々しく笑って見せた。
それから数日経って、喜一は血を喀いた。朝、朝食をすませて、仕事にかかろうと立ち上がった瞬間だった。喜一はよりに言葉少なく指示して、部屋の隅に床を取らせ、這うように近づいて身を横たえた。
茂は畳の上に突っ立ったまま兄を見下ろしていた。目を開いてじっと天井を見つめている兄の顔には、寂しい諦めのようなものが浮かんでいた。やがて、ふと茂の視線に気づいた喜一は、手を弱々しく振って、あっちへ行くように合図した。
「肺病じゃろうか」
茂は兄には聞えぬように口のなかで呟いた。肺病が人に嫌われる病気であることを、茂は知っていた。
「家にゃ肺病の気はなかった。喜一が大阪から仕込んできたんじゃろう」
台所の隅で、せいがよりに聞かせているのを茂は耳にした。
喜一が結核で病の床についたことは、すぐ近所に知れ渡った。すると、それまで仲よく一緒に遊んでいた友達が、思いきり悪く茂を避けるようになった。また、茂の家のまえを近所の人が、鼻と口を被って、走って通りすぎるのを見た。茂は家に結核患者を抱えるということがどんなことかを、つくづくと思い知らされた。
「まるっきり前科もんを出したと同じ扱いじゃ」
茂は少年の心でそう理解した。

喜一が倒れたあと、塗りの仕事は、仏壇や仏具などの技術が必要なのは別にして、床板や下駄、提灯の側などの方は、せいが見よう見まねで引きついだ。それを学校から帰ってきて、茂が手伝った。気分のいいときに、喜一が起きてきて、せいと茂に指図し、教えた。よりは続いて製糸工場へ通っていた。

それでも足りぬ生活の資は、大阪の叔父、津山の叔父がそれぞれに、毎月というわけではなく、せっぱつまった折々に補ってくれた。家族も数少ない親戚も、喜一のからだが回復する日を、半ば諦めながら待っていた。翌年、茂は小学校を卒業した。喜一の寝たり起きたりの生活は、同じ状態で続いていた。茂は中等学校へ行きたかったが、家の暮らし向きを考えると、その希望を口に出して言うことはできなかった。茂は小学校の高等科へ進んだ。

せいは塗りの仕事を諦めた。せいにはやはり無理だったし、どうしても製品に見劣りがするので、仕事がもらえなくなった。そこでせいは、手内職の針仕事に切りかえた。よりもまた四人目の子を宿したため、製糸工場を退いて、家で竹細工の手内職に精を出した。茂も学校から帰ると、よりの内職を手伝った。

が、せいたちのか細い働きでは、病人を抱えての七人の口を養うことはできなかった。親戚や知人から借りられるだけのものは借りつくし、家のなかから、ろくでもない家財道具や衣類が一つずつ姿を消していった。そんななかで喜一は、自分の四番目の子が生まれるのを見た。そして、年が明けてまもなく、喜一は三十三歳で死んだ。

その頃、次兄の啓一は南満洲工業学校を優秀な成績で卒業し、引きつづいて、満鉄の奨学金を

受けながら南満洲工業専門学校に通っていた。その卒業を目前にひかえ、啓一はさらに推薦されて、旅順工科大学に進む予定であった。が、啓一は兄の死と一家の窮乏を知って、進学を断念し、満鉄本社の鉄道部港湾課に就職した。

その啓一に呼び寄せられて、せいと茂と、喜一の次男である次郎の三人は、海を越えて大連へ渡った。次郎のほかの三人の子供はよりの実家へ引きとられ、よりは再婚した。こうして喜一の死をきっかけに、辛うじて保たれてきた朝日の一家は、たちまちに瓦解し、離散した。

が、茂たちにつきまとう不運はそれで終わらなかった。三人が大連へ渡ってまもなく、啓一が腸チブスにかかり、職を休まねばならなくなったのである。知る人もない異郷の地で、頼りにして行った当の啓一に寝込まれ、三人は不安な顔を見合わせるほかなかった。

啓一の家は大連市の西北部、満鉄大連工場に近い社宅の一軒で、日本人の住む街のなかにあった。が、啓一が避病院に隔離され、さらに、啓一の病状が危険なときには、せいは看護のため避病院に寝泊まりしたから、社宅には茂と次郎だけになった。

せいは子供たちのことを隣家の人に頼んでおいたが、茂にもだれが来ても戸を開けないようにと言いふくめた。茂はせいの言いつけを守った。物売りの中国人の片言の日本語は珍しかったけれど、かたくなに戸を開けようとしなかった。

「奥さん、新しいの魚、安いの話よ」

戸外で叫ぶ中国人の声を、茂と次郎は部屋のなかで、息を呑んで聞いていた。

その代わりとでもいうように、二階の窓から通りのアカシア並木、その下を速足で過ぎる馬車、のんびりと歩いてゆく綿服の中国人などを、茂と次郎は飽かず眺めた。家々の屋根瓦の赤や青も物珍しかった。二頭立ての馬車がたまに通ると、茂と次郎は手を打って喜んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com